

形容詞から考える『源氏物語』の語り

富澤 萌未

論文要旨

『源氏物語』には、一人称的な固定化した視点というものでは捉えきれず、語りの位置が不安定で流動的になっていく場面がしばしば認められる。このような文章の特徴については先行研究でもさまざまに論じられ、議論が深められてきた。しかし、このような語りが生じる機構について日本語の特徴を捉えて言及しているものはほとんどない。本論では、現代の学校文法でいう形容詞、形容動詞が主客未分化な特徴を持つているために、語りの中に登場するとその語りの位置が不安定になることを指摘する。

キーワード 【源氏物語、語り、形容詞、形容動詞、時枝誠記】

はじめに

次に挙げるのは、朱雀院の行幸の試楽において光源氏が青海波を舞う『源氏物語』の中でも有名な場面である。

源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入り方の日影さやかにさしたるに、樂の声まさり、①もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏面持、(1)世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと(2)聞こゆ。(2)おもしろくあはれなるに、帝涙をのごひたまひ、上達部親王たちもみな泣きたまひぬ。詠はてて袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる葉のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると(3)見えたまふ。春宮の女御、かく③めでたきにつけても、ただならず思して、「神など空にめでつべき容貌かな。うたて④ゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、⑤おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましと思すに、夢の心地なむしたまひける。

(紅葉賀①三二一〜三二二)⁽¹⁾

この場面は、太字で示した「楽の声」や「日影」と源氏の様子が重なり、傍線部②のように「おもしろくあはれなる」様子を語る。この「おもしろくあはれなる」は地の文であり語り手の評言であるが、同時に、その場にいた人々も「おもしろくあはれなる」と感じていと解釈できる。同様に、傍線部①③も、語り手だけでなくその場の人々が感じたこととも捉えられる。語り手を含むその場にいた人々にとつて、その場の雰囲気をも含んだ源氏の姿が「もののおもしろき」、「おもしろくあはれなる」、「めでたき」様子だったのだといえよう。

波線部を確認しても同じことがいえる。波線部(1)では、源氏の舞う足拍子や表情がこの世のものではないとしている。波線部(2)のように、楽がいったん止まる際に漢詩を吟詠する源氏の声は「仏の御迎陵頻伽の声」と捉えられている。また、波線部(3)のように、吟詠が終わり、源氏がさつと袖を直したとき、それを待ちうけ演奏される楽の音が大きくなると、源氏の顔は色合いがまさりいつもより光るように見えるという。この波線部の前に記されていることも、語り手の感じたこととその場にいた人々が感じたことが重なっている。

その場にいた人々が感じたことは、このように地の文で語られているが、特に帝や公卿、親王たちは、涙を流す様子が注目して語ら

れている。一方で、その場にいた人々の中でも、先のように感じなかった人々もいる。たとえば、傍線部④のように、弘徽殿の女御は源氏の姿を「ゆゆし」と捉えている。弘徽殿の女御は、その場にいた人々のように、源氏のこの世のものとは思えない超常的な姿を感じ取ってはいるものの、その姿を不吉だと評している。藤壺も、傍線部⑤のように、源氏に大それた気持ちになかつたらすばらしく見えるのにと思っている。傍線部③では、その場にいた人々や語り手は源氏の姿を「めでたき」と捉えていたが、藤壺は本来ならばめでたく思う源氏の姿に対して複雑な感情を持っているため、素直に称賛することはできない。だが、源氏のすばらしさは藤壺も感じており、だからこそこのように反実仮想の形で源氏を「めでたく見えまし」と評している。

先の傍線部①③、波線部(1)(2)(3)のような雰囲気は誰もが感じ取っていた。帝や公卿、親王たちは、その様子に感動して涙を流す。一方で、他の人々のように光源氏の超越的な姿を感じ取りながらも、それぞれの複雑な心境によって異なる評価を与える弘徽殿の女御や藤壺のような者もいる。

では、次に行幸本番の光源氏の舞をみってみる。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出で

たるさま、いと①恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り
すきて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を
折りて左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきば
かりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみ
じき姿に、菊の色々うつろひえならぬをかざして、今日はまた
なき手を尽くしたる人綾のほど、②そぞろ寒くこの世のことと
もおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと岩がくれ
山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしもの心知るは涙落とし
けり。(紅葉賀①三二五)

傍線部①のように「恐ろしき」までに見えるのは、源氏一人を指すのではなく、「木高き紅葉の蔭」や「物の音」、「松風」の響き合い、「色々に散りかふ木の葉」の中で舞い出る源氏というその場面そのものである。そうした中、二重傍線部のように、物の価値がわからない下人までもが少しでもわかる者は涙を落としていることが認められる。下人もこの場の「恐ろし」く、「そぞろ寒」い雰囲気を感じ取っているであろう。ここで「恐ろしき」と感じている人物や傍線部②のように「そぞろ寒く」感じている人物は、その場にいた人物たちだけのようにみえる。だが、やはり語り手自身も「木高き紅葉の蔭」や「物の音」、「松風」の響き合い、「色々に散りかふ木の葉」の中で舞い出る源氏の様子といった場面全体を、このように「恐ろしき」「そぞろ寒く」と感じ取っているのだろう。そし

て、この文を読んだ読者も、同じようにこの場面の光源氏を「恐ろしき」「そぞろ寒く」感じるような語りとなつていく。

このような、一人称的な固定化した視点というものでは捉えきれず、語りの位置が不安定で流動的になつていく場面は『源氏物語』の他の場面にも確認できる。こうした語りの特徴については、三谷邦明による「自由直接言説」、「自由間接言説」、藤井貞和による「四人称(物語人称)」、「ゼロ人称(語り手人称)」、高橋享による「もののけのような作者」、「心的遠近法」、陣野英則による「ヘテロフォニー的な複数の話声の重なり」などさまざまに論じられてきた。これらの研究によつて、『源氏物語』の語りについて、その特徴を掴むことができ、深められてきた。だが、このような語りが生じる機構について日本語の特徴を捉えて言及しているものはほとんどない。

登場人物と語り手の心情が重なっている文をみると、学校文法でいう形容詞・形容動詞・知覚動詞が用いられていることが認められる。先の文でも網掛けにした部分のように、「もののおもしろき」「おもしろくあはれなる」「めでたき」「見えぬ」「見えたまふ」、また次の文でも「聞こえて」「恐ろしき」「見ゆ」「いみじき」「そぞろ寒く」「おぼえず」などを感じる主体の位置が不安定だった。本論では、『源氏物語』の語りの位置が不安定である理由の一つとして、現代の学校文法でいう形容詞、形容動詞が効果的に働いているからだと考え、考察を進める。

語りと形容詞や知覚動詞の関係に注目したものは、すでに中山眞彦の研究がある。中山は、フランス語訳からの比較をすることで、『源氏物語』の特に感覚動詞、思考動詞、主観(感情)形容詞にこのような語りがみられることを指摘した。この中山の論は大変重要であるが、基本的にフランス語訳と比較しながら論じているため、形容詞や形容動詞の把握の仕方がやや定まっていない点がある。中山の研究の問題点については二節にて後述する。本論では、中山の指摘を踏まえつつも、改めて形容詞がどのような品詞であるのか確かめ、形容詞が語りにどのような役割をはたしているのか、その機構を明らかにしたい。

一、時枝誠記の「詞」・「辞」

登場人物と語り手の位置が一体化しているような語りになっている理由の一つとして、日本語文の特性がまず挙げられる。特に、時枝誠記のいう「詞」と「辞」の分類が参考になる。⁽⁹⁾では、時枝の研究を概観して、この問題を捉えてゆく。

時枝は、日本語の文法論において、単語を(一)概念過程を含む形式、(二)概念過程を含め形式の二つに分け、古来から用いられた名称の「詞」と「辞」を当てはめた。(一)概念過程を含む形式とは、表したいことをいったん客体化、概念化して音声によって表現するものであり、「山」「走る」などがこれにあたる。一方、

(二)概念過程を含め形式とは、表したいことを客体化せず、直接表したもので、「ず」「む」などである。すなわち(一)は「詞」、(二)は「辞」になる。たとえば、「詞」に分類できる「行く」という単語は、概念過程を経た形式のため「彼は行く」と第三者に対しても用いることができる。しかし、「辞」に分類できる推量の助動詞「む」は、「彼行かむ」とするならば、推量するのは「彼」ではなく、発話主体である。

日本語の文は、「詞」のみで構成されているわけではない。したがって、主体をそのまま示す「辞」が客体化したものを示す「詞」を包むという形になっている。時枝は「詞」と「辞」の結語によって文が成立するとした。これは、「辞」がない文でも同様である。

雨が

右の図が示す様に、辞(が)は、詞(雨)を包む関係に立っている。換言すれば、主体が客体を包んでいるのである。(中略)従って判断的陳述を表す処の文としての「降る」「寒い」という表現も、陳述が「降る」「寒い」に累加していると考えられるよりも、或は又これらの語が本来陳述作用をも同時的に表すものであると考えるよりも、次の図の如く、

降る■

寒い■

零記号の陳述■が、「降る」「寒い」という語を包んでいると考

えるのが妥当であると思う。⁽¹⁰⁾

つまり、「辞」が一見するとなない文でも、話し手の主体が日本語の文には内在しているということである。

こうしてみてみると、日本語文は、ただそこにあるものを客観的に示した文というものはないということになる。「詞」のみであったら客体化したものを示すことができるが、「辞」あるいは零記号がそれを包むため、話し手（書き手）の主観がどうしても、日本語の文にはあらわれてしまう。こうした特徴を持つているからこそ、『源氏物語』の文でも、登場人物だけでなく、語り手の主観があらわれてしまうのだろう。⁽¹¹⁾

しかし、先に確認した『源氏物語』の例では、どの文にも登場人物と語り手の心情の重なりがみられるのではなく、いわゆる形容詞・形容動詞・知覚動詞がある際にあらわれていた。次節にて、日本語文において、いわゆる形容詞・形容動詞がどのようなはたらきを持つのか確認したい。

二、いわゆる形容詞・形容動詞のはたらき

時枝は単語の中には、「流れる」「赤い」のような「客観的な事実の表現する語」と、「悲しい」「ほしい」のような「主観的な情意の表現に関する語」の二つがあると指摘している。そして、特に「主

観的な情意の表現に関する語」については、情意の主体である主語を想定する必要があるとし、形式的には主語とみられるものが、実は対象語であることを考えるべきだと主張した。たとえば、「水がほしい」という場合、主体には「私」が想定でき、「水が」は対象語と捉えられる。しかし、そのような区分けができない語があるという。

ある語については、例えば、

山が見える。

金がいる。

犬がこはい。

今日は暑い。

において、「見える」「こはい」は、「山」「犬」についての客観的事実の表現として、「山が聳える」「犬が吠える」における「聳える」「吠える」と同様に考えられる一面、これらの語は、そのような知覚、感情の主体を主語として想定することにより、「山」「犬」を、対象語として見るということが可能である。即ち、これらの語は、客観的な事実と主観的な事実とを、同時に表現しているということになるのである。⁽¹²⁾

これは、先の『源氏物語』の文にも当てはまる。たとえば、先の例において「いと恐ろしきまで見ゆ」とあったが、これは、「木高き

紅葉の蔭」や「物の音」、「松風」、「色々に散りかふ木の葉」の中で源氏が舞い出る姿を評したものである。だが、同時にそれを見ていた人々や語り手にとって源氏の様子がどのように見えたという意味も含んでいる。

時枝は、このような「あやし」「はづかし」「ゆかし」「つれなし」「見ゆ」を挙げる。特に、形容詞と断定しているわけではないが、これらは、現在学校文法にて形容詞や知覚動詞といわれているものである。「あやし」の例をみてみよう。

「あやし」の語義は、大日本国語辞典によれば、次のように解説されている。

- 一 思ひがけず、不思議なり、くすし
- 二 常に異なり、例ならず、めづらし
- 三 疑はし、いぶかし
- 四 賤し、見苦し

以上の語義を、客観的意味と、主観的意味とに分つならば、二及び四は前者に属し、一及び三は後者に属するということが大體において云われるのではないかと思う。そして、「あやし」と云う語は、一般にはこの両者の総合的表現として用いられ、或る場合には客観的意味に傾き、或る場合には主観的意味に傾くということになる。⁽¹³⁾

このように、時枝は形容詞（特に感情形容詞と呼ばれるもの）や知覚動詞を例にとり、情意を表す語は、客観的な意味と主観的意味の二つを持つとしている。つまり対象化をする「詞」と対象化しない「辞」の両者を併せ持つ語が存在することを指摘しているのだ。その例として、形容詞・知覚動詞を挙げていることは示唆的である。先に指摘したとおり、『源氏物語』でもいわゆる形容詞・形容動詞・知覚動詞といわれるものがあらわれるとき、語りの位置が不安定になっていたからだ。

こうした考えは現代でも引き継がれている。例えば、『日本語学キーワード事典（新装版）⁽¹⁴⁾』を見ると、形容詞が主観的な意味と客観的な意味の両者を併せ持つことが指摘されている。この項目を書いている細川英雄は、このような形容詞の特性を詳しく論じている。⁽¹⁵⁾ とはいえ、時枝の客観的な事実と主観的な感情を同時に表現しているという考えを、そのまま援用してよいわけではない。そもそも、主観と客観と分けてよいのだろうか。時枝は、認識する主体（主観）というものを前提として、認識の対象を客体（客観）として捉えている。⁽¹⁶⁾ そのため、「あやし」という語を「或る場合には客観的意味に傾き、或る場合には主観的意味に傾く」と説明している。しかし、「あやし」は、二や四の意味も主観と捉えることができ、また一、三も客観と捉えることができる。客観、主観という限定は「あやし」という語にはなく、どの場面においても「あやし」という語が一〜四の意味を同時に内包していることが重要になってくる。

つまり、「あやし」という語は、主観と客観が表裏一体になっており、分けることはできない語であると理解できる。

これは「詞」と「辞」の分類にもいえる。「詞」と「辞」の分類にしても、認識する主体を前提としているため、その主体の概念過程が含むのか含まないのが問題となっていた。だが、固定された主体がなければ、そもそもそのような区分は必要なくなってしまう。その一方で、時枝の区分が全く必要ではないとはいきれない。先に確認したように、「詞」と「辞」は二つが結合してはじめて文になるが、客体化する「詞」と主観を表す「辞」に分けることで、日本語の主客が分離できないことを明らかにした。また、それが「あやし」や「見ゆ」などに顕著にあらわれているという指摘も重要である。日本語は、もともと主客を分けることができない、主体の位置が固定できない言語だが、それが顕著にあらわれているのが形容詞や知覚動詞なのである。

では、時枝が指摘していなかった形容動詞はどうだろうか。時枝は形容動詞という品詞を認めていなかった。たとえば、「静かだ」という形容動詞は、「静か」を「詞」に、「だ」を「辞」に分けることができるからである。しかし、このように形容動詞を認定しない時枝の考え方は、現在では疑問視されている。

一方で動詞的性質、他方で形容詞的性質を持ちながら、そのいずれでもないという意味で、「形容動詞」と呼ばれる。(中略)

平安時代になると、形容詞の語彙的不足を補充するような意味もあって、著しく発達した。(中略) 状態や情意を表現する語として他に形容詞があるが、すでに触れたように、形容詞の語種が比較的少なく、語彙的に不足しているため、これを補うような形で形容動詞が発達した。「暖かい―暖かだ」のように、同一語幹が形容詞と形容動詞との両方にまたがっている場合も少なくない。(中略) そうなると形容詞と形容動詞との差は何か、ということが問題になるが、塚原鉄雄(『暖かい』と『暖かだ』、『口語文法講座』三)によれば前者は「属性の抽出」であり、後者は「状態の判定」であるという。(中略) 時枝の考えの根本には、語には客体的世界を表わす「詞」と、それに対する主体的な把握の態度を表わす「辞」とがあるが、その両方の性質を同時にもつたような語は存在しないという前提があり、その帰結として、「静か(詞)だ(辞)」も二語とせざるを得なくなるものと思われる。しかし、近來、詞的性質と辞的性質とが一語の中に共存し得るとする見方が強くなりつつあるから、この点については再考を要する。⁽¹⁷⁾

傍線部のように、形容動詞も、形容詞と同様に、客体的世界を表わす「詞」と主体的な把握の態度を表す「辞」という概念から外れるものだと理解できる。⁽¹⁸⁾ そもそも形容動詞は、形容詞と似た性質を持っていることが研究されてきた。そのため、形容動詞を名詞的形容

詞あるいはナ形容詞、第一形容詞と呼び、形容詞を動詞的形容詞またはイ形容詞、第二形容詞と呼ぶこともある。⁽¹⁹⁾ここでは、その違いについては言及しないが、形容動詞も形容詞と同じように主客が自立していない面が強い語だと捉えたい。⁽²⁰⁾

これについては、はじめに指摘したように、すでに中山真彦が「主観(感情・感覚)形容詞と「思フ」に代表される主観的な思考の動詞」などの情意語によって、『源氏物語』など日本語の物語文が心情を語るときに「心情の主でありかつその言表行為の主体である「私」の声をとおして、その響きを増幅させ」と論じている。⁽²¹⁾

中山は形容詞を主観(感情・感覚)形容詞に限って論じている。日本語の形容詞は、古語でいうシク活用のもは主観的な表現であり、そうでないものは客観的な表現と感情形容詞と状態形容詞の二つを区分しており、一方でフランス語は「構文上の位置にしたがい客観的状态をも主観的状态をも指し得る」としている。そして、日本語の「主観形容詞はあくまでも純粹主観を表そうとする」と指摘している。しかし、属性形容詞と呼ばれる形容詞も必ずしも客観的状态だとはいえない。

しかし、ものの性質を表わす形容詞の中には、同時に感覚を表わすとみられる語もある。たとえば温度に関係のある形容詞のうち「あつい」「さむい」は、次のような例では、しいて求めれば大気がその主体として想定され、その温度が高い・低い

ということが表わされているとみられる。(中略)用例を挙げると人間の感覚器官は、環境の状態を認知して、それに適応した適切な行動をとっていくための手がかりとしての意味をもっている。したがって、感覚は外界の物の状態と密接な関係にある。この両面が同一の形容詞で表わされることがあるのである。⁽²²⁾

時枝が表現主体の存在を前提としたように、中山が感情形容詞を「純粹主観」を表すものとするのも、表現主体というものがあるという前提に基づいている。形容詞は、対象とそれを見ている主体の二つには分割されない。両者が独立せず、あいまいであることが大きな特徴となっている。先に確認したように日本語文自体、主観と客観は独立していない。そもそも二つの区分けはできていないのである。その中で形容詞は特にその性質を強く持っている。

第四節では、こうした形容詞、形容動詞の『源氏物語』の語りにおけるはたらきを具体的に検証するが、その前に形容詞や形容動詞の特徴をもう一つだけ確認する。

三、形容詞・形容動詞とテンス・アスペクト

形容詞や形容動詞は、テンス・アスペクトがつきにくいという特徴があり、知覚動詞とは異なった面もある。次に『源氏物語』にお

ける「うつくし」「うつくしげなり」にどの程度テンスやアスペクトがついているか調査したものを示す。

「うつくし」にテンス・アスペクトがつくもの…五例

・いとうつくしかりつる児かな（若紫①二〇九）

・いとうつくしかりければ（宿木⑤四八五）

・いとうつくしかりければ（浮舟⑥一一三） ※河内本（大島

本）「うつくしければ」

・あてにうつくしかりしことなど思ひ出づるに（蜻蛉⑥二二

五）

・六尺ばかりなる末などぞうつくしかりける。（手習⑥三三四）

「うつくしげなり」にテンス・アスペクトがついたもの…〇例⁽²³⁾

形容詞「うつくし」にテンス・アスペクトがつくものは、『源氏物語』中五例しか見当たらない。また、形容動詞「うつくしげなり」にテンス・アスペクトがついたものは、『源氏物語』中には一例もみいだすことができなかった。動詞と違って形容詞にテンスやアスペクトがつかないのは、次のような形容詞や形容動詞の性質によるものと考えられる。

動詞と形容詞との違いは、よく問題にされるが、要するに事物の属性を運動・生成変化するものとしてとらえたのが動詞であ

り、事物の属性を静止・固定・無変化なものとしてとらえたのが形容詞であるといつてよい。⁽²⁴⁾

形容詞や形容動詞は、事物の属性を静止・固定・無変化なものとしてとらえたものであり、すでにその発話時の状態を表しているため、基本的に時の動きと結びつかない。したがって、「つ」「ぬ」「たり」「り」といった完成相・継続相・結果相などのアスペクトも、「む」や「けり」といった時間の推移を表すテンスも共起しないことが多い。漢文訓読をするときに、必要に迫られたときのみ、形容詞や形容動詞にテンス・アスペクトがつくようになる。

現代語では、形容詞にテンス・アスペクトがつくことも多い。しかし、平安時代では、形容詞に関する考え方が、異なっていたことに注意したい。平安時代では、形容詞が、過去↓現在↓未来という直線的な時間概念から自由であったことが窺える。たとえば、「をかし」とある場合、昔も未来も関係なく、今「をかし」である状態、「をかし」と感じていることが重要なのである。形容詞は、今ここにあるということ強く表す語であることが認められる。

ところで、日本語に「テンス」や「アスペクト」という概念を用いてよいのだろうか。たとえば、現在形（非過去形）は現在のことではなく、未来のことを表す場合もあれば、過去から今までの状態を示す場合もある。また、「けり」は過去の一時点を示すのではなく、現在に流れ込んでくる過去を示すとも指摘されている。⁽²⁵⁾ 藤井貞

和は動詞の活用によって時制を表す西洋語と比べ、日本語は「テンス／アスペクト語としての性格を、文法上、十分に發揮していると言いがたい」とし、「助動辞の存在を待つて、テンスならテンス、アスペクトならアスペクト」を表すのだとしている。時枝の「詞」と「辞」の議論を考察した際、時枝は認識する主体を前提としているため、「詞」と「辞」を分類したのだと指摘した。この「テンス」「アスペクト」を援用することも、同様のことがいえるだろう。認識する主体を前提にからこそ、その認識している時点が固定化されてしまう。だが、特に物語の文では、登場人物たちなのか語り手なのか、その語りの位置はあいまいであり固定化されていない。

日本語に「テンス」や「アスペクト」という概念を直接援用することはできないが、「テンス」や「アスペクト」という概念が日本語ではどのように西洋語と異なるのか、時間概念をどのように捉えられているか考えるために、本論では便宜的に「テンス」「アスペクト」という語を用いている。ひとまず「テンス」「アスペクト」という観点から考えることで、形容詞や形容動詞が用いられるときには特に、語りがある一時点から語られているのだとは想定できなくなる²⁶ことが理解できた。

他にも、形容詞には敬語表現が共起しないことも指摘できる。敬語表現がつかないということは、語り手が前景化しないという点で重要である。この点についてはここでは深く触れないが、語り手が前面に出ないからこそ語りの位置がますますあいまいになっている

ということだけ指摘したい。⁽²⁶⁾

以上、一節から三節まで論じたことを以下にまとめたい。日本語文は、主客が未分化であり、両者が同時に共存していることが特徴として挙げられる。特に、形容詞、形容動詞、知覚動詞は時枝誠記の言う「辞」と「詞」の概念では論じきれない語であり、物語で用いられている場合、語りの位置を不安定にするはたらきがある。また、平安時代の形容詞（形容動詞）は、現在とは異なる認識がされていた。当時の読者は、形容詞・形容動詞がある場面を過去・現在・未来という直接的な時間概念で捉えておらず、今ここにあるものとして捉えていた。形容詞や形容動詞は、ある一時点から語りという、その語りの位置を固定化しないことで、登場人物や語り手だけでなく、読者までも巻き込んでゆく。次の四節では、『源氏物語』の「賢木」巻の本文とそれに対応する『源氏物語』の英訳を比較して、形容詞、形容動詞のはたらきを確認する。

四、『源氏物語』における形容詞、形容動詞のはたらき

次に掲げるのは源氏が六条の御息所のいる野宮を訪れる場面である。

はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花は
みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく

吹きあはせて、そのことも聞きわかれぬほどに、**物の音**でも絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。**睦まじき御前十余人**ばかり、**御隨身**ことごとしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつくるひたまへる御用意いとめでたく見えたまへば、御供なるすぎ者ども、所がらさへ身にしみて思へり。(賢木②八五)

「はるけき野辺を分け」入っているのは、「たまふ」とあるため源氏であると考えられるが、「いとものはれなり」と感じているのは、源氏だけではなく、「睦まじき御前十余人」や「御隨身」、「語り手」さらには、この空間にいるすべての者の可能性がある。また、秋の花や、浅茅が原、虫の音、松風、物の音などが重なり合って、「いともあはれなり」となっており、「ものはれなり」の対象も明確ではない。「いと艶なり」も同様に考えられる。

一方、固定的な視点を持つ英訳では、「ものはれなり」や「艶なり」の主体を特定している。では、まず当該場面のアーサー・ウェイリーの訳を確認する。

As he made his way through the open country that stretched out endlessly on every side, his heart was strangely stirred. The autumn flowers were fading; along the reeds by the river the shrill voices of many insects blended with the mournful fluting of the wind in the pines. Scarcely distinguishable from these somewhere in the distance

rose and fell a faint, enticing sound of human music. (27)

網掛けで示したように「ものはれなり」は源氏の心情のみを表しており、「艶なり」は「者の音」の状態のみを指している。次にサイデンステッカー訳をみてみよう。

It was over a reed plain of melancholy beauty that he made his way to the shrine. The autumn flowers were gone and insects hummed in the wintry tangles. A wind whistling through the pines brought snatches of music to most wonderful effect, though so distant that he could not tell what was being played. (28)

サイデンステッカー訳では、網掛けで示したように、「ものはれなり」の対象は「はるけき野辺」に限定されており、それを感じた人物に関しては言及されていない。また、「艶なり」も「松風」が運んできた、かすかな「物の音」のみを指しており、やはりそれを感じる人物に関しては言及されない。

ロイヤル・タイラー訳ではどうだろうか。

Melancholy overwhelmed him as soon as he set out across the moor's vast expanse. The autumn flowers were dying; among the brakes of withering sedge, insect cries were faint and few; and through the

wind's sad sighing among the pines there reached him at times the sound of instruments, although so faintly that he could not say what the music was. The scene had an intensely eloquent beauty.⁽²⁸⁾

タイラー訳は「ものあはれなり」はそれを感じている源氏、「艶なり」は対象である情景全体を指している。先の二つの訳とは異なり、「物の音」など一つには限定されてはいないが、やはり対象のみに言及している点は同じといえる。

『源氏物語』の本文では、「ものあはれなり」、「艶なり」はそれを誰が感じているのか、その対象は何であるのかがあいまいになっていた。これは、二節で確認したように、形容詞が主体と客体に分けていない語だからである。たとえば、「うつくし」の場合、その対象が「うつくし」の状態であると同時に、その対象を「うつくし」と思う主体の両方が含まれており、もともと主体と客体との区別がない。「ものあはれなり」「艶なり」に主客という概念がもともとないからこそ、語りの位置が固定されていない。

おわりに

以上のように、いわゆる形容詞や形容動詞は、固定的な視点というものを前提としない語であることが確認できた。形容詞や形容動詞は、主体の位置が特に定まらない語であり、物語で用いられてい

る場合も、語りの位置を不安定にするはたらきがある。というよりも、もともと主体の位置は定まっておらず、むしろ形容詞や形容動詞が用いられることで、何かを感じる主体というのがたちあられ、その主体がみる対象もおぼろげにあらわれる⁽³⁰⁾。しかし、形容詞や形容動詞はその主体と対象の区別がないために、たとえば「うつくし」が何を指すのかわからないことになる。

対象とそれを感じする主体という概念がないからこそ、形容詞や形容動詞の意味は読者にひらかれる。たとえば、先の野宮への訪問の場面における「ものあはれなり」や「艶なり」はその主体や対象が不分明であり、読む側がそれを意味付けていた。

同様に、特定の位置を持たない語りだからこそ、その語の発話がいつ時点のものなのか特定することができなかった。「ものあはれなり」は作品世界内に限定されることなく読者もその雰囲気や心情が感じられる語彙となっている。形容詞、形容動詞また知覚動詞は読むたびに、または読む人によってその意味や対象が変わる、ひらかれた語なのだ。⁽³¹⁾

もちろん、これは形容詞のみの特徴ではなく、日本語文そのものにいえる。その日本語文の特徴を最も強く表わしているのが形容詞や形容動詞といった語彙なのである。今後は、形容詞に敬語表現がつかない問題、また似た特徴を持つ引歌や歌ことばについても考える必要があるだろう。

註

- (1) 『源氏物語』の本文の引用は、新編日本古典文学全集により、適宜傍線を付けた。なお、巻名と頁数については括弧内に記した。異同については、注23の『源氏物語大成』を参照した。
- (2) 三谷邦明『源氏物語の言説』（翰林書房 二〇〇二）など。
- (3) 藤井貞和『平安物語叙述論』（東京大学出版会 二〇〇二）、藤井貞和『文法的詩学』（笠間書院 二〇一一）など。
- (4) 高橋享『物語の〈語り〉と〈書く〉こと』（『源氏物語の対位法』東京大学出版会 一九八二）。
- (5) 高橋享『源氏物語の心的遠近法』（『物語と絵の遠近法』ペリカン社 一九九一）。
- (6) 陣野英則『源氏物語の話しと表現世界』（勉誠出版 二〇〇四）。
- (7) なお、学校文法で用いられている橋本進吉の形容動詞という語を用いているが、形容動詞は後述するようにさまざまな名称があるため、説明をわかりやすくするために便宜的に用いている。
- (8) 『源氏物語構造論——『源氏物語』とそのフランス語訳について』——（岩波書店 一九九五）。
- (9) 藤井貞和『文法的詩学』（笠間書院 二〇一一）は時枝の文法論を踏まえて語りの問題を考えている。
- (10) 時枝誠記『文法論』（『国語学原論（上）』岩波文庫 二〇〇七）※初出は、一九四一。
- (11) 時枝の「零記号」を踏まえ、そこから物語の語りの問題について論じたのが、藤井貞和である。藤井は物語には、常に「語り手」という「物語人称（ゼロ人称）」が潜在しているのだと指摘する。本論もこの「物語人称」から多くのことを学んだが、注8中山前掲書、陣野英則「ナラトロジーのこれからと『源氏物語』——人称をめぐる課題を中心に——」（『架橋する〈文学〉理論』「新時代への源氏

学 九」竹林舎 二〇一六）が批判するように、日本にはもともと「人称」が対象化されていないため、あえて西洋語の「人称」をあてはめる必要はないと考えている。

- (12) 時枝誠記「主観客観の総合的表現」（『古典解釈のための日本文法』至文堂 一九五〇）。表記は現代仮名遣、常用漢字に改めた。
- (13) 注12に同じ。
- (14) 「形容詞」（細川英雄執筆）（『日本語学キーワード事典（新装版）』朝倉書店 二〇〇七）。
- (15) 細川英雄「現代日本語の形容詞分類について」（『国語学』一五八 一九八九・九）。
- (16) 「詞」と「辞」の区分にしても、このような前提から導き出されている。
- (17) 山口佳紀「形容動詞」（松村明編『日本文法大辞典』明治書院 一九七〇）。
- (18) 阪倉篤義「単語の種類——形容動詞」（『改稿日本文法の話第三版』教育出版 一九九八）。
- (19) 大野清幸「日本語の形容動詞に関する予備的研究…第一言語獲得過程と動的文法理論」（『愛知淑徳大学論集交流文化学部篇』三二 〇一三・三）のまとめを参照。
- (20) 永野賢「言語過程説における形容詞の取り扱いについて」（『国語学』六一 一九五一・六）は、時枝が「静かだ」を「静か」という「詞」と「だ」という「辞」に分け形容動詞を認めなかつたことに対して、形容詞の「し」「く」なども「辞」の性質があるため形容詞という品詞も消滅するのではないかと論じている。また、藤井貞和「形容、否定、願望」「時間域、推量域、形容域——Zero立休」『文法的詩学』笠間書院 二〇一一）は、形容辞「し」を想定し

ている。

- (21) 注8 中山前掲書。特に第一章で詳細に論じられている。
- (22) 西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」(『国立国語研究所報』四四 秀英出版 一九七二)。
- (23) 池田亀鑑『源氏物語大成』(中央公論社一九八四〜一九八五)に
より調査した。
- (24) 山口佳紀「形容詞」(松村明編『日本文法大辞典』明治書院 一九七〇)。
- (25) 佐竹昭広「説話の原則——歴史叙述と物語叙述」(『萬葉集再読』平凡社二〇〇三)、藤井貞和「伝来の助動辞「けり」——時間の経過」(注9の藤井前掲書)など。
- (26) 一方、知覚動詞には「見えたまふ」「聞こえたまふ」「見えたり」「聞こえけり」など敬語表現やテンス、アスペクトが共起することがある。これは、形容詞と知覚動詞の大きな違いと捉えられる。
- (27) Arthur Waley, *The tale of Genji by Lady Murasaki* (London: George Allen & Unwin, 1926-1933) をもとに適宜網掛けをした。
- (28) Edward Seidensticker, *The Tale of Genji* (New York: Alfred A Knopf, 1976) をもとに適宜網掛けをした。
- (29) Royall Tyler, *The Tale of Genji* (New York: Viking, 2001) をもとに適宜網掛けをした。
- (30) 秋山虔「源氏物語の自然と人間」(『新装版 王朝女流文学の世界』東京大学出版会 一九七二・二〇一五(新装版))、兵藤裕己「虚実皮膜のパフォーマティヴ——物語りの視点・人称・主体——」(『物語研究』一四 二〇〇四)。
- (31) 読み手にひらかれた語りだからこそ、書写の際にさまざまな書き変えが加えられる。陣野英則『源氏物語』と書写行為——書写者の話声——(『源氏物語の話声と表現世界』勉誠出版 二〇〇四)

は物語内部に設定されていた語り手や書き手の言葉とされてきたものも、書写の過程を経て、現実世界の書写者の言葉である可能性を指摘し、物語世界の言葉と現実世界の言葉が弁別できず重なり合っていることを指摘している。さらに、近年の議論を踏まえた上でその議論を進めたものに『源氏物語論——女房・書かれた言葉・引用』(勉誠出版 二〇一六)がある。どちらも重要な指摘であるが、本論で組み込むことができなかった。今後考えたい問題である。

【付記】

本論は、二〇一三年度物語研究会三六〇回例会のテーマ発表をもとに、二〇一七年度学習院大学人文科学研究所若手研究者研究助成を受けて、論文化したものである。発表の際にご意見くださった方々、研究助成をしてくださった学習院大学人文科学研究所、そして二〇一二年度から「日本文学演習」においてご指導くださった学習院大学文学部日本語日本文学科の兵藤裕己先生に深くお礼申し上げます。

ENGLISH SUMMARY

A study on the discourse of "The Tale of Genji" seen from the adjective

TOMIZAWA Moemi

In this paper I would like to consider the narrative voice in "The Tale of Genji" in terms of adjectives. I first look into the Japanese adjective character, and next try to analyze the voice of "The Tale of Genji" and, finally, in the last section, I state the conclusion. I can summarize the results as follows: the adjective and the narrative voice in ancient Japanese narratives are closely connected.

*Key Words: "The Tale of Genji", narrative, adjective, adjective verb, Motoki
TOKIEDA*

